



連日のように繰り返し報道される「(命に係わるような)危険な暑さ」、「日中最高気温41℃超記録、過去最高!」、「これは自然災害として扱うべき!」等々、いい加減「へきえき」させられます。

諸悪の根源が「地球の温暖化」にあり、しかもそれが人間様もたらしたものであろうことを考えると、自然現象を恨み、嘆くのは筋違いだと思うのですが・・・

今我々にできることは「こまめな水分・塩分の補給」と「日射を避け、空調等で体温管理を」というごく当り前のことしかありませんが、我が身を守るためにもぜひ励行しようではありませんか。

＜支部長＞

支部の活動概要

《6・7月活動実績》

6.10 & 7.16 特定NPO 海・河川浄化運動協力(船形小)
6.30(土) 歴史講話(金澤シティガイト、横浜)
7.19(木) 県隊友会前期支部長会議(千葉市民会館)
7.28(土) 7月支部役員会(コミセン)

《8・9月活動予定》

8. 2(木) 派遣海賊対処行動飛行隊出発見送り
8.26(日) 9都市合同防災訓練研修(勝浦市)
9.12(水) 市民講座(コミセン)
「続々歴史認識・日中近代史の深層を探索」
9.29(土) 9月支部役員会(コミセン)

落下傘部隊慰霊祭に「空挺同志会」会員が参列 5.27(日) 安房神社

安房神社で行われた旧海軍落下傘部隊慰霊祭に、思いもよらず大勢の「全日本空挺同志会(注参照)」会員の姿が見られました。今回、空挺同志会千葉県支部が、南房総で訓練行動中の習志野空挺団レンジャー課程訓練生の激励と合わせて、かねてから念じていた安房神社の海軍落下傘部隊慰霊祭への参列の宿願を果たすべく17名の空挺出身の皆さんが来館することになったとのことでした。

平成5年に会員の高齢化に伴い「海軍落下傘会」が解散し、慰霊祭の催行が安房神社に委嘱された以降、会員の参列者も年とともに少なくなり、現在、その子弟や身近な関係者等ごく少数の参列者で慰霊が続けられております。今回、空挺同志会の人たちの足を安房神社へ運ばせたのは、かつて開戦へき頭の南方作戦で陸・海軍部隊がそれぞれ行った空前の降下作戦、その歴史的な偉業から芽生えた親近感・誼(よしみ)と同じような道を歩んできた落下傘部隊関係者としての絆(きずな)だと思います。散華された英霊もさぞ安堵されたことでしょう。空挺同志会の皆さんの協賛に深く感謝申し上げる次第です。

＜川村 記＞

＜注＞「全日本空挺同志会」と慰霊祭について

旧陸軍及び陸自の空挺関係者(OB、現役隊員、家族)で結成する全国的な規模の団体で、「挺身赴難・精鋭無比」の伝統精神を継承し、会員相互の連携感の醸成、空挺部隊等の充実・発展を祈念することを目的とする。

昭和31年に旧陸軍関係者の手で高野山(和歌山)に「空挺落下傘部隊将兵之墓」が建てられ、現在、この地で全日本空挺同志会が主催する慰霊祭が、毎年、全国から大勢の空挺関係者等が集って盛大・厳粛に執り行われ、今年も9月の第63回慰霊祭の準備が進められているとのこと。

なお、旧陸軍関係者の高齢化に伴い、現在、同志会の運営は陸自空挺出身OB会員が主体になっているという。



＜海軍落下傘部隊戦没者慰霊碑前にて＞
(安房神社境内)
空挺同志会会員 岡本勉氏提供

新入会員紹介

7月期 萩岡 誠二会員(海、21整補隊) 即日入会
隈部(くまべ)明教会員(海、21整補隊) 即日入会
長年の海自勤務を全うされ、
隊友会館山支部への入会を歓迎致します。

寄稿：27年目を迎える「第二の人生」に乾杯！

平成4年に54歳で自衛隊を定年退官後「ビル管」を志望し、現在、南房総市久枝の「岩井学園」でビル管理士として勤務、夜勤(午後5時～翌朝8時)を含めて週3～4日、往復40キロの自動車通勤を続けております。今年6月で傘寿(80歳)を迎えましたが、ビル管勤めもすでに27年目に入り、自衛隊勤務を「第一の人生」とすれば、ビル管ひと筋に生きた26年間は私にとってかけがえのない「第二の人生」なのです。

自衛隊在職中に取得したボイラーと危険物取扱の免許がビル管への道を開ききっかけですが、やはり自衛隊での長年のヘリコプター整備経験が決め手になったと思います。定年退職と同時にビル管はじめ電気工事士、消防設備士、調理師等の免許取得に全力を傾注し、本命のビル管試験に合格した時は前途に光明を見出したようなうれしい気持ちで一杯でした。

「ビル管理士」として26年間の勤務あれこれ

「岩井学園」は東京都北区の教委が管理する臨海学校で、小学校35校、中学校15校の児童(小学4・5年生、中学1年生)が利用できるようになっています。体験内容も学年により異なりますが、大きくは「自然体験」と「臨海体験」で、そのため3階建ての本棟はじめ別棟の食堂、体育館、機械室等の施設に加え、IC機器、天体望遠鏡、音響機器等の教材も備わっています。毎年、4月～11月の「事業期間」には、各学校の児童がグループに分けられて入れ替わり出入りしますが、何と言っても利用が集中する夏休の7月下旬～8月中旬の25日間が最も大変な時期で、受け入れ側にとっては一大イベントです。

これらの運営を請け負っているのが、教委から委託を受けた民間会社で、フロントから宿直警備、清掃、調理、設備部門の業務を約20名のスタッフで対応しています。私は3名の設備係の一員として、主として電気、水道、ガス、空調、衛生設備等の運転・保守整備に当たっていますが、繁忙期には清掃の手伝いや厨房機器、教材修理の手助けをすることもあります。

12月～3月は「事業外期間」として学園は閉鎖されますが、この時期は設備機器の分解点検や故障予兆の見極め等、修理専門業者の選定を含めて設備係としての本領発揮の機会でもあります。このへんにもヘリ整備の経験を存分に活かすことができたと自信を持って言えます。

学園には4名の教員(OB)が現地指導の役目で常駐しております。概して学校と自衛隊、教師と自衛官とは「相容れない」関係があるやに言われますが、26年間の勤務を通じて先方から気軽に相談を持ちかけられたり、逆にこちらからの改善提案やアドバイスをすることもあり、多くの場合、好意的に受け入れてもらいました。日常業務中での「クイックレスポンス(迅速・的確な対応)」と「誠心誠意尽くしたことが」先方に通じ、お互い胸襟を開くことに結び付いたもの思っております。

地域社会貢献も自衛隊OBの務め

現在、館山市特別職員として農業協力員や交通指導員、明るい選挙推進員のほか、交通安全協会交通指導員西岬支部長、JA安房地区総代、浜田共有地組合長等々を引き受けております。(高齢者が多い中、多分に押し付けがましい点はあるものの)地域社会への貢献も住民として、また自衛隊OBとしての務めと割り切っております。とは言え交通指導員として炎天下1時間の立ち番や若潮マラソンでの6時間の安全監視役などは、老齢の身には正直大変「しんどい」のです。

一方で、開隊記念式典、殉職隊員慰霊祭等の部隊行事や年1回の総会、新年会など隊友会・館空会の行事等には努めて参加しております。今年1月には県隊友会の新鋭護衛艦「いずも」の研修に参加し、6月の河川浄化運動のお団子(EM菌)づくりでは童心に帰って奮闘しました。

健康状態、老後の抱負など

12年前に肺炎で重症と診断され、もうこれまでと観念しましたが、1か月間の入院治療で奇跡的に回復しました。その後も白内障の手術や、3年に1回くらい再発する原因不明の「船酔い症状」など、加齢現象のせいでしょうが、検査を受けながら様子を見ることにしております。

よく「いつまで(仕事を)続けるつもり?」と聞かれます。現在は定年のないパートの身分ですが、現在の勤めに「やりがい」を感じ、先方(雇用主)からも信頼・期待されている」ことを考え、答えは「身体が動くかぎり続けたい」ということに尽きます。最後に、周囲の人々の理解、温情に対して感謝を込めて「乾杯」を捧げ、あわせて自分自身への励みとしたいと思います。

＜網代 緑 理事役(海)＞

空水協同対潜部隊の誕生と館山航空隊の変遷

S18年に入り活発化した米潜の行動によって海上輸送の動脈を絶たれ、遅きに失した感はあるがS18年12月、初めての「海上護衛総隊」が編成された。艦艇と航空部隊が一体になった空水協同海上交通保護作戦により、残された比島～千島海域の物資輸送路の確保に活路を求めたものである。護衛航空部隊を統括する第901航空隊(「901空」)が新編され、館山に司令部を置いて各鎮守府(現在の各地方総監部)所属の館山航空隊(「館空」)ほか9個航空隊(乙航空隊)を指揮下に編入した。兵力(隻数、機数)の面では兎も角、いかんせん旧式艦艇、旧式航空機が主力を占めていた。

「901空」の新編・作戦担当海域が拡大した館空

館空は当初、大井(静岡)等を前進基地として海上護衛作戦に従事していたが、S19. 11には主力の艦上攻撃機全機が中国の三亜基地(海南島)に派遣され、仏印(ラオス、ベトナム)東岸海域の護衛作戦に投入されることになった。

「903空」の新編と館空の解隊・明暗を分けた作戦海域

S19. 12、さらに第903航空隊(「903空」)が編成され、館空は解隊されて903空に編入されることになったが、艦上攻撃機隊はそのまま901空の指揮下に残り、仏印東岸方海域の海上交通路保護作戦を続けることになった。

※903空の指揮下に入った元館空司令は、903空派遣隊長として水上偵察機隊を率いて浜島及び串本を前進基地として、紀伊半島海域を航行する東航・西航輸送船団の直衛、前路哨戒等に当たっている。

残された派遣隊の戦時日誌によれば、護衛・哨戒作戦中の艦載機等との交戦場面は皆無に近く、5月中旬には903空の指揮を解かれ、水上偵察機隊はそのまま再編された館空に復帰している。

※一方で、仏印東岸の護衛作戦に従事した艦上攻撃機隊については、戦時記録も皆無でその消息を知るすべはないが、護衛戦闘機隊皆無の状態での作戦行動と、米軍の反復攻撃による護衛部隊の甚大な被害を考え合わせると、攻撃機隊全滅の可能性も否定できない。

館空の再編 S20. 5 米潜の行動が日本海、北海道東岸方面へ移るに伴い、903空は大湊へ移動し、館空(水上偵察機隊)は指揮を

解かれて館山に復帰、館空として再編された。(以下略)

＜自称地域史探索マニア その21＞